漢字基底語考

林　　四　郎

I. 漢字使用の意識の底にあるもの

わたしたち現代日本人が話したり書いたりするために漢語を用いる場合、また、用いられた漢語を理解する場合、その漢語に用いられている漢字の意味を字別に意識することが、多くの場合、行われているだろう。例えば「前進」ということばを用いるとき、多くの人が「前へ進む」と意識するにちがいない。「前」という漢字について、わたしたちは「ゼン」を音と称し、「まえ」を訓と称している。同様に「進」の「シン」を音とし、「すすむ」を訓とする。この場合、ともに、訓がその字のもつ意味を保障しており、大多数の日本人の頭の中で、同じ保障が行われていると推察される。

「後退」ということばでは、どうであろうか。私自身の意識をいえば、これは「あとへさがる」と意識される。もちろん、「あと」は「うしろ」とも置き換えうるし、「さがる」は「しりぞく」とも置き換えられる。しかし、「うしろへしりぞく」よりは、「あとへさがる」の方が、はるかに早く思い浮かぶ。「後」という字には、「あと」という訓も「うしろ」という訓もあって、当用漢字音訓表にも、常用漢字表案の音訓欄にも、記されている。「退」の方では、「しりぞく」という訓は両表に認められているが、「さがる」という訓は認められていない。すなわち、「退」にとって「さがる」は、字義あるいは意味であって、訓とはいいがたいものである。しかし、これは、あくまでも、歴史的な問題であって、ある時期のある人びとは、「さがる」を「退」の訓と考えていただろう。「すさる」「しさる」「ひく」「しぞく」なども同じ位置にある。現代日本人の多くの人の意識の底に、「後退」という漢語を支えていることばが「あとへさがる」として在るか、「うしろへしりぞく」として在るか、はたまた「あとへひく」か、「うしろへしさる」か、それを正確にとらえることはむずかしい。

「前進」も「後退」も、どこまで行っても、「ゼンシン」「コウタイ」それ自身であって、「まえへすすむ」も「あとへさがる」も、ありはしない、それら

はただ、意味の似た別語として在るだけである――と言ってしまえばそれまでである。私も、「前進」と「前へ進む」とが同じ語だなどとは、まさか、考えていない。意味ですら決して同じではない。感じのちがいだけでも、すでに、意味合いのちがいはあるのだから。

ただ、私が言いたいのは、現在、多くの日本人が「前進」という漢語に対して「前へ進む」という語句を、意味の上でほとんど等価なものとして容易に置き換える習慣をもっているということである。その「容易に」ということは、あるいは、「無意識に」とか、「何となく、いつの間にか」とか言いかえた方がいいかも知れない。

このように、わたしたちが漢語を使うときに、用いられる漢字を、意味上非常に近いやさしいことばに置き換える用意をもちながら使っているという事実に注目したい。必ず置き換えているとは言わない。実際には置き換えていないかも知れない。しかし、ふと意識したときに、置き換えてもすこしも不自然ではないだけ近いところにそれがあることを認めうる状態にある――そういうことが言えると思う。そういう状態を「置き換える用意をもちながら使っている」と、今、述べたのである。

こういうふうに、漢語を使う際、多くの人の意識の底に存在するとおぼしいことばを仮定し、これに、漢字の基底語という名を与えたい。漢語の基底語といわず、漢字の基底語というのは、漢語を、1字1字の漢字に還元して、それをあることばに置き換える習慣が、目下のところでは、まだ、日本人の間に、かなり行きわたっていると思うからである。

このような漢字の基底語がどこまでどのくらい成立しているか、確実なことは言えない。それが言えるかどうかを知るための部分的な調査を、私は行っているが、ここでは、その調査報告をするのではなく、私の仮定する漢字基底語の様相を、考え方のメモとして、ここに記しておきたいのである。

まず、大まかに、漢字の基底語のありかたを類別すると、

(1)　基底語がはっきり指定できる場合

(2)　基底語をずばり1語指定するのはむずかしいが、多くの人が認知する共通の意味があり、語にすればいくつかの語に分れざるをえない場合。これを基底意味と呼ぶことにする。

(3)　基底語も基底意味も見出しがたく、全くはっきりしない場合

の3段階になろう。

だから、2字以上の組み合わせでできている漢語についていうと、次のよう

なケースに分れることになる。

（1） 1字1字に基底語がはっきりしている場合

例えば、「前進」のごとくである。また「針葉樹」であれば、「針のような葉の樹(き)」と、だれでも意識するであろう。

（2） 1字の基底語ははっきりしているが、もう1字の方は基底語をもつまでに至らず、基底意味をもつにとどまる場合

例えば「庶務」「熟考」「所定」など。「庶務」の「務」は「つとめ」という基底語が明瞭だが、「庶」の方では「いろいろ」とか「もろもろ」とか「雑多」とかの意味を思い浮かべるにとどまり、一つの基底語が指定されるには至らない。「熟考」の「考」に基底語「かんがえる」があることは明らかであるが、「熟」には、「うれる」も「熟する」もぴったりせず、「つくずく」とか「よくよく」とかいうような意味を思うであろう。「所定」は、漢文訓読に慣れた人なら、直ちに「定められた」と取るだろうが「所」は必ずしも受身を意味すると考えなくてもよく、文字通り「ところ」として「定まるところの」と考えてもよい。「定まっている」でもいい。「定」が「さだめる」または「さだまる」であることは動かないが、「所」に一定の基底語を当てることには無理がある。しかし、基底意味は明らかにある。

（3） 1字の基底語ははっきりしているが、もう1字の方には、基底意味すら想定しにくい場合

「輩出」という語がある。「出」の「でる」は明らかだが、「輩」は何か、現在では確たる意味が感じられないのではあるまいか。元来は、百台の車を意味したそうで、多数のものが相並んでやって来るように、続々と出て来るのが輩出らしいが、現在は、必ずしもそういう意味で用いてはいない。ある地方からただ一人の偉人が出ても、その地方は人材を輩出したことになるであろう。

古いことばに「逆旅(げきりょ)」ということばがある。宿屋を意味する。「旅」に「たび」「たびびと」を思うことは昔も今も変らないが、「逆」が元来「迎える」の意味であったことは今はすっかり忘れられた。現代語で、迎える意味の「逆」の用法は、ほかに一つもないから、この「逆」は何だかわからない。

（4） 1字1字に基底意味があり、ともに基底語までは設定しがたい場合

「突如」ということばで、「突」には、「前触れもなく急激に」という意味が容易に思い浮かぶし、「如」には副詞として働く「ありさまで」とか「そのように」とかの意味を感じるが、ともに、特定の語を基底語として要請することは無理である。「措置」ということばでは「措」にも「置」にも、「手を下す」

とか「何とかする」とかいうような意味を感じるが、基底語をさがすことは到底できない。

（5）1字に基底意味が考えられ、他の字には基底が考えられない場合

「工夫(くふう)」ということばは子どもも使うやさしいことばだが、この「夫」は何のためについているのかわからない。「工」の方も、「つくる」という基底語を考えることは無理であるが、「何かを作り出そうとして努力する」というような意味は感じられるので、その程度の基底意味を設定することができる。「夫」は中国語のときからついているが、それでも役目があまりはっきりしない。日本語ではいよいよわからなくなった。だからといって、「夫」が無用になっているわけではない。「くふう」は「工夫」で「くふう」なのである。

「厄介」ということばも、極めて日常的で親しみ深い語だが、できかたのよくわからないものに属する。辞典を見ると、わかったようなわからないようなことが書いてあるが、結局、意味を支えているのは「厄」だけであって、「介」は現在のところ個別には働いていない。

「工夫」にしても「厄介」にしても、ことばができた当時は、両字とも対等に働いていたにちがいないが、意味が変って来たり、当て字をするようになったり、いろいろな事情で、1字1字の意味があやしくなって来たわけである。これがもっと進めば、次の項のように、両字とも、1字1字ではわからないことになる。

（6）1字1字にすると、どの字にも、基底語も基底意味もなく、できあがりの語にのみ意味がある場合

これは案外多い。しかも、日常的なことばの中に、かなりある。「挨拶」「滑稽」「面倒」「滅法」「恰好」「咄嗟(とっさ)」「覿面(てきめん)」「途端」「胡散(うさん)くさい」「骨頂」などのことばにおける各漢字には、調べれば意味のわかるものもあり、調べてもわからないものもある。結局、現在、一般に使う人の頭の中に、これら1字1字の意味が生きているとは到底言えないので、字別の基底意味を考えることができない。もし考えれば、こじつけになるであろう。このタイプに属する語については、それを書くときに、人びとの態度が、漢字派と仮名派とにはっきり分れる。意味がわかりもしない漢字をいちいち書くのは面倒だから「めんどう」と書こうという人と、一字一字は不明でも、両字合わせたときにその字のもつイメージが浮かび上がって来るのだから、めんどうでも「面倒」と書くという人とに分れるわけである。これらの語で「面どう」だの「めっ法」だというまぜ書きは考えることもできない。

さて、漢語と漢字基底語との関係を大体このようにとらえておいて、あとは、考察の対象を字に限定し、漢字にどのような型の基底語や基底意味があるかを見渡してみよう。

II. 漢字の基底語・基底意味

これを、次のように5種に分ける。

A. 基底語が明瞭に認められるもの
B. 基底語から基底意味へ移りつつあるもの
C. 基底意味としてとらえるべきもの
D. 特別な過程を経て別種の基底語を得たもの
E. 基底のとらえがたいもの

A. 基底語が明瞭に認められるもの

A—1. 定着した字訓

古代の日本人が中国から漢字を受け入れたとき、字音をそのまま日本流にして使った使い方と、その字の表す中国語に意味のよく似た日本語をさがし、その字を直ちに相等日本語のための字として使った使い方とがあることは、だれも知るとおりである。その前者は「音」または「字音」と称せられ、後者は「訓」または「字訓」と称せられる。

漢字を音で使うことは間違いのない使い方ではあるが、借り物の使い方で、靴をへだててかゆきをかくところのある使い方であっただろう。それに対し、訓で漢字を用いるときは、ときに原義からずれる危険性はあっても、わが物としての使い方であって、意味もわからずに使うということは、この場合、起りえなかった。千年以上、日本語のために漢字を使って来た日本人が、漢字の訓に親しみをもち、これを棄てがたく思うのは当然のなりゆきである。

訓の中にも、定着度の高い訓と、それの低い訓とがある。定着度の高い訓とは「国」の「くに」、「高」の「たかい」のようなもので、訓の日本語が漢字の原義にぴったりしていたためか、その後の日本人がその訓の範囲内でその字を用いて来たためか、その字を見たら、いつも、その訓を思えば、意味の受けとりかたに間違いがないという事実を生んで来たものである。定着度の低い訓については、B の項で述べる。

当用漢字の音訓表で認めている訓は、大体において、定着度の高い訓だとい

うことができる。だから、この例は非常に多く、枚挙にいとまがない。

「国」でいえば、この字を造語要素にしてできる漢語は非常に多い。

◆国家　国会　国交　国際　国籍　国道　国民　国立：愛国　外国　帰国　建国　出国　大国　天国　隣国

など、きりがないが、これらの例で「国」に「くに」を押し当てて、意味のとりちがえは決して起らない。「国家」は「くにという一つの家」、「愛国」は「くに愛をすること」と考えて正しいし、わたしたちは、そういう翻訳過程を支えにして、これらの漢語を使っているということができる。

次に、いくつか、代表例をあげておこう。

◆城――しろ

城郭　城内　城中：牙城　開城　居城　築城　登城　籠城

どの例でも、意味が「しろ」から離れることはない。

◆窓――まど

窓外　窓下：学窓　車窓　同窓

「学窓」や「同窓」では、物質としてのまどからは、やや意味が離れて、比喩的になり、抽象化されてはいるものの、窓が窓以外のものになったのでは決してない。落ち着くところは「まど」しかないのである。

◆打――うつ

打開　打撃　打算　打診　打電　打倒　打破：強打　乱打

ほかに野球用語がたくさんあるが、もちろん、どれも「うつ」が支えている。上の例の中で「打算」だけが「打つ」ではおさまらない。中国語にもあることばで、同じく、心中の計算を意味するらしいが、この打は、そろばん玉を「はじく」ということであろうか。そうだとすれば、この語については、打の基底語「うつ」が退いて、代りに基底意味「はじく」がすわることになる。

「打つ」などは他動詞の用法しかないが、多くの動詞は自動詞と他動詞とに分れ、語根が同じだから、漢字は一つの字が受けもつことになる。例えば「乾」という字は「かわく」と「かわかす」とを受けもち、「乾燥」「乾物」では「かわく」が基底語になるが、「乾杯」では「かわかす」の方が基底語になる。この場合、厳密にいえば、乾の基底語は「かわく」と「かわかす」の二つに分れることになる。しかし、実際には、二つの分れ目がはっきりしないことが多い。「乾物」も、「かわいた物」とも考えられるし、「かわかした物」とも考えられる。基底語のレベルでは、自動・他動の区別を立てないでおいた方が実情に合うので、そうする。

「重」という字には、「おもい」という形容詞の基底語と「かさねる」「かさなる」「おもんずる」という動詞の基底語とがある。

◆重――おもい(「おもさ」を含む)

重圧　重厚　重視　重症　重傷　重責　重大　重病　重役　重量：荷重　厳重　体重　鈍重

重――かさねる・かさなる

重箱(じゅうばこ)　重版　重複(ちょうふく)　二重

重――おもんずる

尊重　自重(じちょう)　珍重　貴重　慎重

「おもんずる」の場合に、発音が「ジュウ」でなく「チョウ」になっているという対応がある。ただし、「チョウ」のときは「おもんずる」だとはいえない(「鼎の軽重を問う」は「ケイチョウ」だが、「軽いか重いか」だから)ので、こういった対応がいつもあるとはいえない。また、「尊重する」「自重する」「珍重する」と動詞用法の語の場合は「おもんずる」がぴったりするが、「貴重な」「慎重な」と形容動詞用法の場合には「おもんずる」がやや苦しく、そうかといって「おもい」でもないというような歯切れのわるいところが出て来る。この基底語論には、どうしても、割り切れないものが残ることは承知のうえである。それを無理に割り切ろうとすると、とんでもないこじつけの議論になるので、そこは警戒しなければならない。

以上、例に示したようなものは、いずれも、当用漢字音訓表にのっている無難な訓であるが、音訓表には記されていなくても、現在では、まだ、多くの人に訓と意識されているにちがいないもので、基底語の働きをしているものがある。

例えば「庫」に訓「くら」を意識するのは自然であろう。

◆倉庫　国庫　在庫　金庫　車庫　宝庫

等の語における「庫」に基底語「くら」を認めることに無理はないと考える。

以下、二三の例をあげる。

◆護――まもる

護衛　護岸　護憲　護身：愛護　援護　看護　救護　守護　弁護　保護　擁護

以上の「護」は「まもる」以外の何者でもない。

◆貯――たくわえる

貯金　貯水　貯蔵　貯蓄

◆恒――つね

恒久　恒常　恒例

当用漢字とその音訓表を制定したときの考えで、これらの字にこれらの訓を与えなかったのは、異字同訓をなるべく作らないためである。護に「まもる」を認めると、「守る」と「護る」をどう使い分けるかを問題にしなければならなくなる。同様に「蓄える」と「貯える」、「常に」と「恒に」も区別しなければならぬとすると、厄介なことである。過去の日本人がそういう使い分けで頭を悩まして来たのはむだなことであったから、それをやめようというのが、戦後の国語政策の、一つの重要な考え方であった。これは大変大事なことであって、決して間違ってはいない。私も、異字同訓の使い分けをやかましく言うことには反対したい。ここで私が「護」の基底語に「まもる」があると認めるのは、だからといって、護の訓に「まもる」を加えよと言って主張することに直ちにつながりはしない。それはまた別の次元の問題として、どうしたらよいかを考えなければならない。今は、記述する立場で現実を見ると、音訓表に認められてはいないが、認められている訓と同様に基底語として働いている一類の和語があるという事実だけは、見ておかなければならないのである。

A—2.　独立性の高い字音

現代の日本語の中で、漢字1字を独立させて使う場合は、たいてい、訓の用法で、1字の字音語を独立させて使うことは比較的少ないのであるが、それは、少ないというだけで、決して、無くはない。

- 席があいた。席をゆずる。席につく。
- 点がたりない。点を打つ。点になる。
- 台が要る。台を組み立てる。台に置く。

これらの文例で、「席」「点」「台」は字音で独立した1語になっている。こういうものが、会、線、面、件、券、項、宙、策、像、層・・・等、少なくはない。これらは、1字の字音が、そのまま、日本語としても立派な単語になっているもので、それを和語に言いかえてみないと1語と感じられないという状況はない。「席」や「点」を和語に言いかえようと思っても、言いかえられることばがないのである。

したがって、これらの字を含む漢語においても、これらの字は、その字音自身が基底語として働く。

◆席――セキ

席次　席上：宴席　議席　客席　空席　欠席　座席　主席　首席　出席　退

席　着席　同席　臨席　列席

いずれの語の中でも、席は席で働いており、他に置きかえて理解する過程は考えにくい。

「点」ということばでも同じことが言えるが、この場合は、「点」自身の意味が「点―線―面」ととらえられる元来の意味と、点数の意味とに分れ、さらに「点ずる」という動詞の用法ももっているので、基底語「テン」が、細かくいえば、三つに分化するわけである。

◆点――テン（面積のない位置の意）

点在　点線　点点：汚点　観点　起点　極点　欠点　原点　交点　黒点　視点　弱点　終点　焦点　美点　要点　力点　論点

点――テン（点数の意）

点差　点数：加点　採点　失点　同点　得点　満点　零点

点――テンずる

点火　点灯　点滅

のようになる。そして、よくわからない用法として「点検」「点呼」「合点」などが残る。点検も点呼も、元来第一の意味で、一点一点に注意して検査するとか、ひとりの人名を一つの点と見なして、もれなく名を呼ぶということであろう。合点の点は、和歌や俳句の師匠が弟子たちの歌句に批評の意味の点（筆先でチョンとやる）を打ったこと（だから、点をつける人を点者という）から出ているということだから、これも第一の意味に属するわけである。「点検」や「点呼」は、そう言われれば、「点」の意味がそのまま生きているので、別の基底語を考える必要のないことがわかる。「合点」のごときは、一筋縄ではいかないが、これは語ごと意味や用法に変化が来たので、「点」の部分に変化が生じたのではない。さきにあげた「面倒」や「滑稽」の類にかぞえるべきものであろうか。

今の「点ずる」の例に見るように、一字の字音語ではあるが、「する」がついて動詞になったり、「な」がついて形容動詞になったりしたものが基底語になることがめずらしくない。

◆対――タイする

対案　対応　対外　対岸　対決　対抗　対処　対象　対照　対人　対戦　対談　対等　対面　対話：応対　敵対　反対　絶対　相対

いずれも、「対する案」とか「対して談ずる」「人に対する」「敵として対する」などと理解される。「絶対」「相対」といえば哲学的でむずかしく聞えるが、「相

対」の方は元来文字通りの意味で少しもむずかしくない。それから考えれば、「絶対」の方も、対比して判断するという判断のしかたでないことを意味するのであろう。

◆徹――テッする

徹底　徹夜　徹頭徹尾：一徹　貫徹　透徹

ここでは、「とおる」「とおす」という基底語を考えることもできるが、今や「徹する」の方が力強く働いているだろう。

◆純――ジュンな

純愛　純情　純金　純毛　純綿　純粋　純潔　純真　純正：清純　単純

これらの例で、「純」の意味を言いかえれば、「まじりけがない」とか「それだけでできている」とか、説明的な文句をもって来る以外にない。純は純なのである。その1字の純の意味をなるべく崩さない2字の語に「純粋」があるので、「純粋な」が「まじりけのない」に並んで「純」の説明文句になることがある。これは、あとでDの項目で述べる問題になるのであるが、「純」は「純粋」を待つまでもなく、それ自身が基底語であると見てよい。

B.　基底語から基底意味に移りつつあるもの

B—1.　古風になった訓

字訓は歴史的な存在であるから、基底語としてよく働く現役の訓もあれば、時の流れのうちに古びて来た訓もある。「聖」の「ひじり」とか「后」の「きさき」とかがその類のもので、これらは当用漢字音訓表には採用されなかった。昭和47年に音訓表が改定され、かなりの数の訓が復活したときも、「ひじり」「きさき」は、議論はされたが、やはり入れられなかった。

「健」に「すこやか」という訓がある。「異」に「ことなる」という訓がある。これらは当用漢字の最初の音訓表から入っているが、かなり古風な感じのすることばで、「ひじり」や「きさき」とあまり変らないようにも思われる。「異なる」は数学で「相異なる二辺」というように使うから、学生諸君には案外親しみがあるのかも知れないが、「健やか」となると、若い人にはまるで古典的なことばと思われるのではなかろうか。

その字が当用漢字表にあるかないかとか、その訓が音訓表にのっているかどうかは問題外として、上に例を引いたような、現在としては古風に感じられる訓が基底の位置にあると見なしうる場合について考えてみたい。

◆健――すこやか

健康　健全　健脚　健筆　健在　健闘：穏健　強健　頑健　剛健

健康を「すこやかでやすらか」と言い、健全を「すこやかでまったい」と言っても、若い人なら、いっこうピンと来ないであろう。それより「健康」「健全」のままの方がよほどよくわかるにちがいないから、「健」の基底語をわざわざ和語に求める必要はないだろう。これもD項に送って考えた方が適切である。ここで例とするのは、健の基底語は「すこやか」だと主張するためではなく、基底語を和語に求めれば「すこやか」しかないということと、中年以上の人なら、かなり「すこやか」に基底を感じるであろう、世の中は変って行くと言いたいためである。

「速」という字の訓には「はやい」と「すみやか」とがある。「すみやか」は、はじめ音訓表になかったのが、昭和47年の改定で加えられたものである。

◆速度　速力　速記　速成　速達　速報　速球：音速　風速　快速　急速　迅速　敏速　加速　変速　失速　時速　秒速

これらの例で「速」の基底には「はやい」「はやく」「はやさ」のいずれかを当てれば足りる。「すみやかな」「すみやかに」「すみやかさ」といったことばを動員しなければならない理由はひとつもなく、動員してみても、いっこうに冴えない。だから、「速」の基底語は「はやい」(「はやく」「はやさ」を含む)だと言い切って何もわるいことはないのだ。ただ、ここで言いたいのは、「速」を支える「すみやか」の存在は、論理的には「はやい」とほぼ同じであり、「すみやか」が耳に親しい人にとっては、立派に基底語でありえているということである。

◆拙――つたない

拙劣　拙速　拙攻　拙守：稚拙　巧拙

拙攻も拙守も野球の技術を評することばである。一般には「拙」は造語力の弱い造語要素であり、現代に生きている例はこのくらいであろう。この中で、「つたない」は、どこでも基底語として働いている。ただし、私たちに親しいことばでいえば「まずい」「へた」の方がずっとよくはまる。「つたない」という古風な訓は棄てて、これらの語を基底意味と認めた方が事実に合うであろう。ただ、「まずい」は通俗に過ぎ、「へた」には漢字「下手」を当てる習慣があって、まさか「拙」の訓と扱うことはできないのに対して、「つたない」は「拙」の訓として由緒正しいものだから、これを「拙」の基底語と考えるのが自然だというような事情がある。現実の音訓表では、どういうものか、「つたない」は採用されていない。

「調」という字には「しらべる」「ととのう」「ととのえる」という訓がある。この「しらべる」が名詞に転成したものに「しらべ」ということばがある。これは雅語のひびきをもったことばで「琴の調べに耳を傾ける」というような言い方の中でしか生きていない。しかし死んだことばでは決してない。

「調」で作られることばには、この「しらべ」を基底語とするものが案外あり、

◆諧調　格調　基調　曲調　色調　転調　変調　歩調　乱調

など、音楽用語および、それからの転位でできたことばにそれが見られる。「しらべ」を基底語とすると今言ったが、これは、実は、古きよき時代に育った優雅な人にとっての話であって、現代の人は一般に、ここで「しらべ」を思い浮かべることはないであろう。その代りに思い浮かぶのは、恐らく「調子」ということばであろうと思う。そうすると、これも D 項送りの例となるが、働きがどこかに残っている古風な訓の例でもあるので、ここに引いた。

「すこやか」「すみやか」「つたない」「しらべ」と四つの例をあげたにとどまり、且つ、それぞれに事情の異なるところがあったのであるが、古風になった訓ということで考えたかったのは、現在、それらを訓とし、それを基底語と見なすには迫力にとぼしく、無理があるが、それらの訓が現役である環境を想定すれば、基底語としてよく落ち着く、そういう一類の旧訓があるということ、従って、現在生きている訓の中にも、次第にこの類に入って行く可能性のあるものはあるということである。

B—2.　抽象化について行けなくなった訓

ことばの意味内容は、はじめは、たいてい具体的なもののようである。それは、日本語でも中国語でも同じであろうが、日本語の中での展開としては、まずは、和語が具体的なものをさすのに用いられ、その語の意味が次第に、比喩的にひろがり、抽象化して来るとともに、それに相当する漢語の方にくらがえして行って、全体に、具体的表現を和語に托し、抽象的表現を漢語に托すような習慣を生じたといえよう。例えば、「目(め)」または「まなこ」という和語と「眼目」という漢語とでは、受けもちの範囲が非常にちがっている。考えの中心点を「目」ということはないし、顔にある目を「眼目」ということはない。

漢字の訓にも、この事情が反映していて、ある漢字の訓が具体的な内容のことばでついたために、その訓のままでは、抽象的内容の語の基底語になりえないことが起こる。

「綱」という字の訓は「つな」でしかありえない。この字が作る熟語には

◆綱紀　綱領：大綱　要綱

などがあるが、これらのことばの意味を「つな」が受けもつことはできない。「大綱」だけは「おおづな」とも読めるが、そう読んだときは、物質としての太いつなをしか指さない結果となって、「タイコウ」の意味は消えてしまう。

「研」の訓は「とぐ」である。「研磨」という漢語は、現実に研ぎ磨くことを意味するから、この語における「研」の基底語は「とぐ」であるにちがいない。しかし、「研究」「研修」「研鑽」の「研」に「とぐ」を当てはめても通用しない。「研ぐ」といえば、どうしても、刃物や爪をがりがりこすって鋭くすることをしか意味しないようになっている。

「体」の訓「からだ」は、

◆体育　体温　体質　体重　体操　体調　体力：遺体　巨体　死体　上体　身体　胴体　女体　肉体　老体

のように生身のからだを意味することばにおいては、基底語の役目を果しているが、

◆体系　体制：大体　弱体　主体　重体　字体　書体　文体　風体　本体　正体　全体

のように抽象的な意味のことばにおいては、働きを失ってしまう。そして、

◆機体　車体　船体

のように、間違いなく具体的物質を指してはいるが、人間でも動物でもないものについて言っている場合には「からだ」が通用するようでもあり、しないようでもある。飛行機や車両や船を擬人的にとらえれば、「からだ」が生き、純粋に「もの」としてとらえれば「からだ」が無理になるのである。

「綱」と「研」と「体」と、三つの例をあげて、「つな」「とぐ」「からだ」の訓が抽象的な意味の世界では基底語として働かなくなる次第を見た。それらの訓が働かなくなったとき、これらの語には、ほかの訓がないのだから、意味を言い表すためには、その都度、字訓以外のことばを借りるか、あるいは、借りる必要もなく、その字音がそのまま基底語となるか、あるいは、その字音を含む別の漢語が基底語に回る (D 項) か、さまざまなケースに分れることとなる。例えば「字体」「書体」「文体」などでは、「体」が「すがたかたち」「スタイル」などの基底意味をもつというべきであろう。

B—3.　現代では意味をなさなくなった旧訓

前々項の古風になった訓が、もっと古風の度を増して、すでに、現代人には理解できなくなったり、理解できなくはないまでも、はなはだ縁遠い感じがす

るようになったものがある。次のようなものである。

県――あがた	台――うてな
段――きだ	帳――とばり
性――さが	階――きざはし
缶――ほとぎ	局――つぼね
諾――うべなう	漁――すなどる
肯――がえんずる	購――あがなう

ここに例示したものの中にも、いろいろな性格のものがある。例えば、「がえんずる」や「あがなう」だったら、中年以上の人には、かなり親しいことばかも知れない。漢文訓読になれた人には、「亦説シカラズヤ」の「説(よろこば)し」とか、「耳順フ」の「順(したが)ふ」のように、1字で表す動詞や形容詞を訓で読むことを当然とする習慣があるであろうから。名訳といわれた明治以来の文語訳聖書は、漢字をたくさん用い、ルビをつけて訓で読む方式であったから、クリスチャンには、「あがないの子羊」(この「あがない」には「購」ではなくて「贖」を当てるが)とか「人をすなどる者」とかいうことばが耳に親しい。ついでに言えば、あの文語訳聖書は、目には漢語的で、耳には和語的な文章の一大名品である。中村正直の『西国立志篇』などにもこの傾向は見られるが、耳で聞く音の流れのよさでは、到底、聖書の文章の比ではない。

中年以上の人にはそうであっても、若い人には、「うべなう」「すなどる」「がえんずる」「あがなう」の類は、ほとんど意味をなさないことばなのではなかろうか。

「あがた」や「うてな」となると、若い人をもちだすまでもなく、私自身にも、すでに意味が感じられない。以前、動詞の活用の種類で四段活用とか上一段活用とかいうのを、それを見出した人たちは「よんきだのはたらき」とか「かみひときだのはたらき」とか言っていたのを知って甚だ驚いたことがある。

自分の家のカーテンを「とばり」という人はいないであろうし、「この子はすなおなさがをもっている」と言う人もいないだろう。しかし、「夜のとばり」とか、「悲しきさが」とかいう言い方は、よく耳にもするし、自分で使うこともめずらしくないのである。

「台」という字は、すでに、A の2で、独立性の高い字音をもち、字音自身が基底語として働くものの例にあげた。「購」は、「買う」「買い入れる」などの基底意味をもつものと考えられる。「性」なら、「性質」または「性格」という二次的基底語をもつに至ったものとして D 項で扱われることになる。

このように、各字の基底は、今や字訓以外のところに求めなければならないが、もし、古来の訓が今も生きていたとしたら、立派に基底語として働くはずであった、そういう一群の訓があるということに注意しておこう。

C. 基底意味としてとらえるべきもの

漢字の要素は、形・音・義であるという。「義」は「字義」とも言い、その字が表すことばの意味を指す。意味は、使う人の頭の中にある漠然としたもので、なかなかとらえがたいものだが、それを説明するとなれば、何とか、別のことばに表さなければならない。それを表すについては、おのずから、くどくど説明する部分と、ずばり、ほかのことばに置き換える部分とに分れることとなる。漢字の表す中国語の単語の意味を、日本語の単語への置き換えで示したのが「訓」で、訓が非常にわかりやすければ、くどい説明は一切いらないわけである。A—1. の項に示したのが、説明が要らないほどにぴったりした訓のグループである。

現代日本語と漢字との関係において、A—1. に扱われるものは、訓が漢字と日本語との仲を取りもって、非常に円満でしあわせな関係を作り得ているものである。B の項では、訓が、漢字と日本語との仲を取りもつ力を失ってしまったり、失いかけているものについて、その様相を三つに分けて見たのである。

次に、この項目では、現在の標準的な位置づけでは字訓として扱うのに無理があるが、そのことばが、かつては、その字の訓として通用していたこともあり、現在の私たちにとっても、そのことばをその字の意味を表すものと考えることには抵抗がないような、そういうことばと漢字との関係を考えてみたい。本稿の最初から、基底語のつぎに位置するものとして「基底意味」と言って言及して来たものがこれである。

基底意味を表すことばも、字訓への近さによって、3段階に区別される。

C—1. 訓に近い基底意味

さきに、A—1. 項の後半に、現在の音訓表には記されていないが、普通の日本語使用者には無理なく訓と意識されるものの一類を挙げ、「庫(くら)」「護(まもる)」「貯(たくわえる)」「恒(つね)」の4語を例として示した。

字訓としての意識がこの一類よりは一段と落ちるが、なお、かなり訓の性格を存し、ある程度以上の年齢層の人には訓と意識されるにちがいないことばで、その字の意味を語る点においては、若い層の人に十分効力をもつと思われるものがある。

育――はぐくむ　　赦――ゆるす
製――つくる　　視――みる
拙――つたない　　未――まだ...ない
標――しるし　　樹――き

「そだてる」より「はぐくむ」の方が親の愛情を表し、教育の本質を示すことばだから、「育」の訓に「はぐくむ」を落してはならないと、強く主張した教育学者があった。その人の価値観においては、「教育」「愛育」「養育」等は「教えそだてる」「いとしみそだてる」「養いそだてる」ではなく、「教えはぐくむ」「いとしみはぐくむ」「養いはぐくむ」として意識されるわけである。

◆赦免：恩赦　特赦　容赦

などにおける「赦」を「ゆるす」で受けとめることは、大方の人の意識において不自然ではあるまい。

◆未定　未知　未婚　未熟　未納

などの「未」が、「まだ定まらぬ」「まだ知られぬ」「まだ結婚していない」「まだ熟していない」「まだ納めていない」と働くことは、だれの目にも明らかであるが、

◆未来　未明　未遂　未満

などによると、あるものは余りによく使われるためか、いちいち「まだ来ない」「まだ明けない」と意識されるに至らず、直ちに「さきのこと」「明け方」と置きかえられる。「未遂」や「未満」では「まだ」が薄くなって、単に「なされず」「満たず」と打ち消すだけのことばになっているようである。

「視」が「見る」であり、「樹」が「木」であることは全く疑う余地がないであろう。

◆視界　視覚　視察　視聴　視野　視力：監視　凝視　軽視　重視　巡視　正視　注視　敵視　無視

◆樹木　樹皮　樹脂　樹氷　樹林　樹齢：大樹　植樹　落葉樹　常緑樹　針葉樹　広葉樹

等の例において、それは明らかである。

C―2.　一般に字義としてとらえられるもの

これとても、ある人びとには訓と感じられるかも知れないが、一般の意識は、もはやそれを訓と感じないであろう、しかし、間違いなく字義を表している、という一群のものがこれに属する。

◆午――ひる

午前　午後　午睡　午餐：正午

◆　功――てがら

功名　功労　功績　功罪：成功　奏功

「てがら」はやや古めかしくなったことばなので、功績を「てがらの実績」と言ってみてもあまりぴんと来ないかも知れない。「成功」は日常の基本語で、字に基底を要しなくなった部類に入るし、「奏功」は「功を奏す」で、「功」が字音で独立し、A―2. 項に属すると見た方がいい、というような語別の事情はあるが、「功」の「てがら」は、概して、意味として生きているといえよう。

◆態――さま、ざま、すがた、かたち、ありさま

態度　態勢：状態　実態　形態　事態　生態　常態　旧態

訓にいちばん近いのは「ざま」かも知れないが、これらの熟語の中で、意味としていちばん働くことばは「ありさま」であろうか。「態度」や「状態」は基本語中の基本語であるから、「成功」などと共に基底の支えを要しないことばではある。

◆報――しらせる、しらせ

報告　報知　報道：一報　通報　吉報　朗報　急報　警報　予報　誤報　情報

◆謙――へりくだる

謙虚　謙譲　謙遜

◆熟――よく、よくよく、じっくり、つくづく、つらつら

熟考　熟慮　熟睡　熟知　熟練

「熟」が2字目に回って

円熟　習熟　成熟　早熟　未熟　完熟

のような語を作る場合は、「熟する」が基底語（A―2. 項）となり、「よく」などの基底意味は働かない。

◆単――ひとつ

単独　単身　単一　単数　単複　単価　単線　単調　単発　単能機

これらの語例では、単の「ひとつ」が明らかであるが、「単純」「簡単」のようなことばでは「ひとつ」の感じはあまり強くなく、「あっさり」「手がこんでいない」のような意味が強くなる。これらも基底の要らない基本語に属する。

◆釈――とく、とける

釈放　釈然　釈明：解釈　講釈　注釈　評釈

「とく」は「解く」「説く」、「とける」は「解ける」「溶ける」で、みな、しこ

り固まっているものを解き放ち、しこりのない、通じやすい状態にすることである。

◆稚――おさない、わかい、子どもっぽい

稚気　稚拙　稚魚　稚児：幼稚

「わかい」「おさない」は、「稚」の訓として通用して来たことばであるが、現代の感覚では、稚の表すものは、「子どもっぽい」というのが最もそれらしい。

この種類の基底意味は、さまざまな形に分れて雑多な性格をもつこととなり、挙げればきりがないものである。この類型を整理する必要があるだろう。

C—3. 字義のとらえかたに統一した形や単純な語句が求めがたいもの

「稚」の基底が訓に近い「わかい」から、意味の自由記述に近い「子どもっぽい」に、「熟」の基底が、「じっくり」「つくづく」「つらつら」など様ざまな形を要求するように、意味のとらえかたは、次第に広がり、一つの単純な形ではおおえないようになる。

「航」という字の表す語は、舟で水の上を行くことを意味するが、どういうものか、この字には、昔から適切な訓がなかったようだ。「わたる」という訓が辞書に見えるが、あまり実例を見ない。現在は飛行機の時代であるから、「航海」よりも「航空」の方がずっと多く使われるが、「航路」「航行」「運航」「就航」「欠航」などのことばは、船にも飛行機にも共通して用いられている。これらのことばの「航」のところに、基底として働くことばは、もとより見出しがたいが、共通する意味は、ある。あるが、なかなかとらえがたい。どうやら、「コースに沿って行く」というようなことになるらしい。

「陳」という字は、「陳列」「出陳」のようなことばでは「ならべる」という基底意味をもっている。「陳述」「陳弁」「陳謝」「陳情」「開陳」などでは、訓と扱っていいほどの「のべる」が基底語になっている。しかし、「陳腐」「陳套」や「新陳代謝」では、「並べる」「述べる」とは全くちがう「古い」という意味が働いている。それも、ただの「古い」ではなくて、「古くさい」「古くなって、魅力や活力を失った」といった意味である。

「本」という字は大変よく使われるもので、その多くは、「本家」や「基本」のように、「もと」という基底語で単純に支えられている。しかし、「本」に、一類、別の用法があり、「本日」「本年」「本学」「本官」のように用いられる。「本日」「本年」のことは言うまでもない。「本学」は、大学関係者が自分の大学を呼ぶときのことば、「本官」は警察官等が自分のことを言うときのことばである。つまり、これらの「本」は、簡単に言えば「この」であるが、「この」

では表しきれない、「今話しているこの時、この私にかかわる」のような、正確に言えば長くなる基底意味をもっているわけである。

「洞」という字は「ほら」や「ほこら」の訓をもっていたこともあり、「ほら穴」という基底意味をもっている。これは単純なことで、「洞窟」「洞門」「空洞」などは、その基底意味が支えている。しかし「洞察」は「ほら穴」ではどうにもならない。現代では、洞窟よりも洞察の方がよほど大事なことばである。洞には、ほかに、「貫きとおる」「奥底まで達する」という動詞の意味があるようで、これが働くから、洞察が、「いちいち調べないで、いっぺんに奥深いところまで認識する」という意味になるわけである。今は「洞察」しか用いないが、以前は、「洞見」「洞徹」「洞胆」「洞識」などのことばがあったようである。

「洞」などは、基底意味をとらえるのが格別むずかしいわけではなく、例として、あまり適切でなかったかも知れないが、ここでは、一定の語句への単純な言い換えではなかなか済まない、ひとくせもふたくせもある基底意味の存在を指摘すれば足りるのである。

D. 特別な過程を経て別種の基底語を得たもの

この項については、すでに、いくつかの語例で予告をした。例えば、「純」(A—2. 項) を「純粋」が代弁するとか、「健康」または「健全」が「健」の1字を代弁し、「すこやか」よりもずっと代弁する力が強いということを述べた。

元来は、言うまでもなく、「純」があって「純粋」ができたのであり、「健」があるから、「健康」も「健全」もできたのである。しかし、今や、「純」よりも「純粋」の方がやさしいことばであり、「健康」や「健全」に至っては、全く日常必須のことばで、耳にするや否や、考える余地も何もなく、直ちにわかることばになっている。日本人社会で言語生活をしていれば、「健康」や「健全」の意味を学習する時期など、恐らく無いだろう。いつの間にか耳に入り、目に入って、調べるまでもなく、わかりきったことばとなるのである。これらの語を学習しなければならないのは、日本語を学び始めた外国人だけであろう。私たち日本語生活者にとっては、「健康」とは、「健」の意味と「康」の意味とが合わさったもの、というのではなく、逆に、「健」とは健康のことだと言われて、ああそうかということになるのである。「健」の1字よりも、「健康」ということばの方が、私たちには、親しく、やさしいものなのである。

このような関係が、今や、かなり多くの漢字について成り立っている。「調子」ということばが「調」を代弁し、「約束」ということばが「約」を代弁す

る．このように、その字を造語要素としてできた漢語の中に、極めてよく使われて完全に日常化したことばができて来ると、その語の方が、その語の要素である漢字よりも理解しやすいものとなる。こういう場合、あとからできて、やさしくなった語を、その字の基底語と扱うことができる。「健康」（または「健全」）、「純粋」「調子」「約束」を、それぞれ、「健」「純」「調」「約」の基底語と見るのである。それはどういう現象か、具体例を示そう。

◆健――健康

健脚（健康なあし） 健胃錠（胃を健康にする錠） 健在（健康な状態で在る）：頑健（頑丈で健康） 強健（強くて健康） 保健（健康を保つ）

健――健全

健筆（健全な筆運び） 健闘（健全なやり方でたたかう）：穏健（おだやかで健全） 剛健（剛直で健全）

「健康」と「健全」がはっきり分れるわけではないが、どちらかといえば、肉体的、生理的な意味のとき、「健康」が出張り、精神的な意味のとき、「健全」が出張るという関係ができているらしい。

◆調――調子

体調（体の調子） 色調（色の調子） 歩調（歩く調子） 論調（議論の調子） 好調（調子が好い） 低調（調子が低い） 復調（調子をもどす） 変調（調子を変える） 同調（調子を同じくする）

「調査」「調印」「調髪」のように「調」が1字目に立つ語では「調子」が基底語に出て来ないで、「しらべる」や「ととのえる」が基底語になる。

◆約――約束

約定（約束し定める）：違約（約束をたがえる） 確約（確かな約束） 婚約（結婚の約束） 特約（特別な約束）

のようになる。「倹約」「節約」「集約」「縮約」「要約」「制約」等の「約」は、これではない。そこでは、「つづめる」「しぼって細くする」などの基底意味が働いている。

◆権――権利

人権（人間としての権利） 女権（女性の権利） 特権（特別な権利） 男女同権（男も女も権利が同じ） 棄権（権利を棄てる）

権――権力

王権（王の権力） 実権（実際の権力） 金権政治（かねで権力を牛耳る政治） 中央集権（中央に権力を集める）

のように、「権」の基底語は「権利」と「権力」とに分れる傾向がある。「権力」はまた「権限」と交替してもよい。「拒否権」「以遠権」、法務大臣の「指揮権」のように、接尾語として働く「権」では「権利」と「権限」とが微妙な差で交替し合うようだ。

◆機――機械

機具（機械や道具） 機種（機械の種類）：扇風機（風をあおる機械） 計算機（計算する機械）

「機」には「からくり」とか「はた」とかいう古い訓があったが、もはや基底語として働かなくなった。しかし、「からくり」のもつ「しかけ」の意味は生きていて、それによって「機械」という語もできたのである。「機」のもつ「しかけ」の意味は、一方では抽象化して行って「動きを作り出すもの」「動きを起すきっかけ」「無駄のない動き」などの基底意味を作り出した。「機会」「機縁」「機運」「機敏」「機先」「機転」「好機」「危機」「勝機」など、時の流れと物事のめぐりかたとを掛け合わせたところにできてくる一連のことばは、いずれも、このような基底意味の上に成り立つものである。そして、この一群のことばは、機械という物質のかたまりとは、あまり縁のないものばかりである。

現代は機械の時代であるから、電子計算機、金銭登録機、自動販売機、電気洗濯機・・・と、限りなく機械が作り出される。それらの末尾の1字は、ほとんどが「機」であろう。その基底語は、言うまでもなく「機械」である。機会や機縁のようなことばは語の種類に限りがあって、いくつかかぞえ立てれば終りになるうえ、これから造語されることは、まず無いであろう。機械を基底語とする「機」の方は、今後いくらでも新造語を作り出すこと確実である。

「機」について、もうひとつ言うべきことがある。それは、

◆旅客機 軍用機 ジェット機 戦闘機 大統領専用機

などの「機」は、単に「機械」ではなくて、機械を基底語にしてできた「飛行機」を意味しているということである。ここでは、もはや「機械」も基底語ではありえなくなって「飛行機」が「機」の基底語になっているのである。

このように、ある漢字が、その字を造語要素としてできたある漢語を基底語としてもつだけでなく、さらにその漢語を基底語として二次的に派生したもうひとつの漢語を基底語とするようになることは、結合の自由な漢語の性格からして、少しも奇異には感じられない。

また、こういう現象もある。

「学」という字は「まなぶ」という明瞭な基底語をもっている。その点「機」

や「権」が訓に近い基底語をもたないのと、非常に状況がちがう。しかし、「学ぶ」が基底語として実際生きている語にどんなものがあるかというと、「学問」「学校」「学生」「学習」「学齢」「独学」「自学自習」「男女共学」「外国留学」といったようなもので、思ったほど多くはない。そして、それよりも多いのは、「学問」「学校」の2語を基底語とするものである。

◆学――学問

学位　学科　学会　学界　学芸　学識　学風　学力　学説：科学　雑学　修学　無学

このほか、いくらでもあるのが

◆医学　化学　哲学　理学　工学...

歴史学　政治学　経済学　法律学...

のような学問名称である。また、

◆学――学校

学区　学内　学外　学窓　学則　学制　学歴：開学　入学　官学　私学　在学　退学　進学　復学

のように、「学」に「学ぶ」を入れても語の意味がおちつかず、「学校」を入れておちつくものが意外に多いのである。つまり、「学」には、「まなぶ」「学問」「学校」と、三つの基底語（場合によっては「大学」を入れて四つ）をもつわけである。さきにあげた「調」なども、「しらべる」「ととのう・ととのえる」「調子」の3語を基底語とすると見るのである。

「刻」は、基底語「きざむ」によって「刻印」「深刻」「彫刻」「時刻（時を刻む）」等を造語するほか、その「時刻」が基底語に回って「一刻」「先刻」「即刻」「定刻」「遅刻」「夕刻」のような時のことばを作り出す。

こういうことが多くの漢字に見られるのである。

E.　基底のとらえがたいもの

第Ⅰ部において、「面倒」「挨拶」などの語を例にして、構成各字の基底がとらえがたい場合があることを述べた。そのことを、ここでもう一度言えばいいだけのことであるが、ここでは、1字1字のことを記述しているので「工夫」の「夫」、「厄介」の「介」も同じ列に入るものであることを確認しておく。

そして、「挨拶」「滑稽」「滅法」のように、少々調べた程度では、全く納得できる説明が得られないもののほかに、調べればわかるけれども、一般の人が使うときには、ほとんど、その正しい字義など念頭にないというものは、案外

少なくないように思う。少なくとも、私自身には、そういうものがいくつもかぞえられる。

「正義」の「義」はわかるが、「講義」「精義」「釈義」などの「義」は、「意味」とか「わけ」とかいうことだろうか、よくわからない。

「気候」「天候」の「候」、「郊外」の「郊」、「従容」の「従」、「処女」の「処」、「交迭」の「迭」など、私は、よくわからぬままに使っている。わかっても、わからなくても、それはそれで働いているのであって、国語の先生はそれらの字の意味を原義・転義の関係などを明らかにして、生徒に詳細に説明しなければならないとは、私は思わない。

III. このあと、なすべきこと

以上、漢字が日本語の中で働きをするについて、各字の基底部にあって、私たちの漢字使用を支えていると思われる単語や語句や意味のありかたを類別して考察した。この考察は、私たちがこれから漢字をどう扱うかを考えるために、基礎的に大事なことだと思っている。

しかし、考察がここで止まるなら、格別の意味をもたないであろう。今後しなければならないことが次のように、ある。

1) 類別に従って、ここでは、わずか数例ずつを挙げたにとどまる。当用漢字や常用漢字のすべてを含む二千数百字を対象にして、字ごとに、それぞれがどれだけの基底形式をもつかを記述する。

2) 基底語・基底意味が関係し合って日本語の単語を作っているので、その関係の形式を句構造としてとらえ、基底句構造の形式を一万語以上の単語について記述する。

3) 統一した構造表を作り、漢字ごとに、それがどれだけの基底語・基底意味と基底句構造に席をもつかを調べる。

4) 漢字の日本語への役立ちかたを、漢字の機能度としてとらえ、基底構造形式によって各漢字の機能を記述する。

5) 漢字の機能度を数量的に算出する方法を考案する。

本稿の考察は、昭和52年度から3年間にわたって行なわれた文部省科学研究費による特定研究「言語」(総代表者、大塚明郎)の中の1班である「文字表現力と音声表現力との関連」(代表者、林四郎)の研究としてなされたものであ

る。これについての林の発表は、

○「漢字研究の一視点」昭和53年3月、筑波大学文芸・言語学系紀要「文芸言語研究、言語篇」第2号。

○「漢字使用の基底構造」昭和53年3月、林四郎著『言語行動の諸相』(明治書院) 所収。

○「基礎的語彙と教育漢字学年配当との関連表」昭和54年10月、班報告資料。

○「漢字語彙資料」昭和55年3月、班報告資料。

○「文字システムの評価」藤崎博也編『言語の評価』(三省堂、昭和56年刊行予定)所収。

○「漢字を評価するための観点」昭和56年3月『馬淵和夫博士退官記念論文集』所収。

以上、6点ある。これらの中で、本稿の論と最も密接に関連するのは最後のもので、それには、今後なすべきこととしてかかげた第2、第3の項目にかかわることについて述べた。併せ見ていただければ、しあわせである。